

兄 帰 る



かしおり

兄帰る

始まりは妹の帰省だった。男を連れてきた。妹より十も年下の、だから彼より十五下のこぎれいな若い男だった。妹の隣に仕上げの良い室内犬のようにここにこ笑いながらちょこんと座っていた。浮かれた母が料理を取り分ける。毎年恒例の高島屋のおせち料理和洋二段。刺身。生野菜サラダ。そば。そして唯一の手製、きんぴらごぼう。

「あ、ケンミンショーでやってました。ほんとに群馬ではそばにきんぴらごぼう入れるんですね」

若者が言う。なにかすごい発見をしたかのような得意顔だ。母はあらまあなどと言ってうれしそうに笑う。妹はにこりともしらず目をくるりと回し、肩をすくめた。そんなので喜んだら田舎もん丸出しじゃないのよ、と思っている、と彼は悟る。そういう女なのだ。いいじゃないか、これなかったら全く地方色ないぜ。

「ねえ兄さん。テレビ消さない？」

いつもは彼に向かって「おい」「なあ」としか呼びかけないのに、「兄さん」ときた。彼は無視して「爆笑ヒットパレード」を見て爆笑する。たいしておもしろくもなかったが。

「そうね、とりあえず乾杯しましょう」

料理を取り分けた母がさりげなくリモコンに手を伸ばし、電源を切る。彼は肩をすくめスーパードライの缶に手を伸ばした。届く前に妹が取り上げる。来客があるときにだけ出される小ぶりのバカラにビールが注がれ、乾杯などと彼以外のそれぞれが若干の気恥ずかしさを含んだ声を上げた。一気に飲み干した彼は二杯目は手酌で、三杯目は注がずに缶に直接口をつけずる音をつたてて飲んだ。

「お兄さんはお仕事は何をされてるんですか」

「ああ、あのね、ずっとフリーで仕事してて。いまは不景気だからあれだし、だから、しばらくしたら勤めに出るのよね」

彼の代わりに妹が答える。

「へえ、自由業ですか。いまどきすごいなあ」

将来の弟となるそのこぎれいな男は彼をまぶしそうに見た。

「ねえ、このおせち。どうぞ。食べてみて」

危険水域を避けるように妹が話をそらす。ありがとう、と若い男は行儀よく箸をつける。

「小説書いているんだ」

彼が言う。食卓に沈黙が落ちる。次の瞬間、妹と母がそわそわとビールを注ぎ、刺身を勧めだす、それをさえぎるように未来の義弟が声を上げた。

「へえ、すごいな。自分ほとんど小説とか読まない人間なんですよ。創作活動とか？　そういうクリエイティブなことも、ぜんぜん。作文すら苦痛でしたもん。すごいなあ、尊敬しちゃうなあ。どんなの書いているんですか」

そんなにたいしたもんじゃないよ、と言いつつも、興味があるなら話してやってもいいけどと彼は構想中の大傑作の概要をさわりだけ話してやった。もちろん自称作家ではある。が、誰でもその名を知るようになるのはそう遠い未来ではないだろう。未来の義弟が義弟になるよりは早いはずだ。だからそのへんは先取りしても問題はない。決して四十二にもなって保険外交員の母親に寄生するニートなどではない、そういう体をとりにくろえればいいのだろう、苦い顔の妹のめくばせに彼はわかってるさと無言で答える。たやすいことだ。実際、自分はニートなどではないのだから。俺は普通の人間とは違う、いつかこの俺の大傑作が完成したとき、世の中はひっくりかえる。世紀の天才あらわる、同じ時代に生きてよかった、と人々は感動の涙を流すのだ。それはもうすでに確定的な未来である。だからほんのちょっと先取りして話すだけだ。嘘にはならない。

彼の構想する小説は常に大傑作である。前衛的で、ラジカルで、本質的な、大作だ。彼の大傑作は大傑作ゆえに、紙に書きつけようとするとその数万分の一も表すことができない。やはりいまどきはPCであろう、と母親に無理言って買ってもらった富士通FMVデスクパワーに向かったが、アダルトサイトとオンラインゲームで二か月まるまるつぶし一文字も打つことはなかった。文学とは作者の身体性の発露である、ならばこんな指先で電子の変換に依存しきった行為が真の表現などに結びつくはずもないのだ、とワープロソフトの使い方もままならぬままだアダルトサイトとオンラインゲームの道具として墮しておくことに決めたのだった。かくして彼の大傑作ははまだ彼の頭の中だけのものである。そして大傑作ゆえに概要などにまとめられるはずもないのを無邪気な未来の義弟に無理してまとめて話そうとしたのがやはり無理だった。筋はとび、キャラは破綻し、テーマは支離滅裂だった。混乱した。話す彼が混乱したのだから聞いている方はもっと混乱していただろう。従順な、純粋な、尊敬のまなざしをむけていたイケメンの未来の義弟の頬がひきつりはじめ、手元のグラスをいじりはじめる。さりげなく視線をおせちの重箱に移し、箸を取る。妹がビールを注ぐ。母が何かを取りに席を立つ。普段小説など読まない人間に対しての説明としてはいささか難しすぎたかと彼も省み、失われつつある興味を再度盛り上げようと声のボリュームを上げ、トーンを上げる。少々焦る。焦るとさらに支離は滅裂。気が付けば母と妹と未来の義弟は応接間へと座を移し三人でほのぼのと世間話をはじめていて、彼はただ大声でひとりごとを言っているにすぎなくなっていた。さわりはしよせんさわりなのだ。それで何が理解できよう。こんな平穏な正月の食卓で簡単に話せるようなしろものではない。彼は自作の構想のかさをのみそこで改めて納得することで口を閉じた。やっぱすげえ俺。初対面の凡人を黙らせ、低能で俗物な家族の無理解をかう。茫漠の海へと突き落としてやった。

西高東低の冬型の気圧配置ゆえ関東平野の果ての地の元旦はいつもたいてい快晴なのだった。県外ナンバーの路上駐車車両が住宅地の通りを占領している。くつきりとした短い影を踏みながら彼はぶらぶら歩いた。乾いた空気に白けた日光が充満する。子どもが羽根つきなどしていない。風揚げする電線のない広い空もない。きゆうきゆうと建売住宅が並んでいる。道を歩く人間など彼以外ひとりもない。静かだ。路肩からからに乾ききった枯葉が溜まっている。くしゃりと踏む。通りに出るとスーパーマーケットの駐車場に入ろうとする車が長い列をなし、何事かと思う。この店にしかないマイナーなメーカーの薄荷飴のタブレットを買おうと思ったのだが、店内もまた人々でごった返していて彼はたじろいだ。みんな何本ものペットボトルと酒と刺身や寿司や揚げ物などのバックをカゴに乗せ、通路をうろつきまわり、レジに長い列を作っていた。都会から帰省した家族にささやかなごちそうをふるまおうと群れているのだ。田舎者どもめが、と彼はあごをあげ、心の中で毒づき、薄荷飴はあきらめて、店の入り口にある自動販売機で五百ミリリットルの缶ビールを買った。そしてそれをのみながらまたぶらぶらと家へと戻った。そうだ「爆笑ヒットパレード」見よう。

思えば不穏な流れはそのときから始まっていた。未来の義弟がいよいよただの義弟になろうとするその春、イコール家に彼らが入り込むということだ

った。妹はそれまでに彼をなんとかしようともくろんだ。なんとか、というのは、例えば就職して家を出ていく、例えば女を見つけて同棲でも始め家を出ていく、例えば本当に大傑作をものにして時の有名人となる、ということだが、最後はまったくありえないと考えていたし、ふたつめも世の中にそんな奇特な女がいるわけがないと彼の妹は普通に思っていたので、要するに就職活動をしろと猛然とはっぱをかけたのだった。

昨年すなわち二〇一一年七月、地上デジタル放送が始まり自室のテレビでの鑑賞が不可能になったのもある。結局、元旦のあのあと、「爆笑ヒットパレード」は見せてもらえなかった。テレビの見られない自室は砂漠のようだったし、リビングでは彼のテレビチャンネル選択権はほとんどないに等しかった。

自由とは何か。彼はそれを考えた。

別に屈したわけじゃないのだ。凡人の無理解だとただただそのまま軽蔑の眼差しを向けつづけるのは、やはり血を分けた兄妹であるし、しのびない。三十七とはいえ、いつまでもかわいい妹としてあり続けてほしい。どうだましたのか知らないがようやく捕まえた若い男と末永く平凡で蒙昧な幸せを全うしてほしい。ならばここでひとつ自分が大人になって身を引いてあげようではないか、と考えた。母は彼に十万円を握らせた。寮のある就職先をあてがった。上等じゃないか喜んで自分もだまされてやろう、親孝行だ、と彼はにこやかに手を振り家を出たのだった。

もちろん、賄いつき独身寮完備の警備会社などに彼は行かなかった。まずは東京だな、と新幹線で上京し、東京駅近辺のぶらりと行き当ったビジネスホテルに滞在した。自分ほどの天才であってもやはり現代社会の実情を取材するのは無駄ではあるまいと考え、日々あてもなくただぶらつき歩いた。気が付けば所持金に万札が見当たらなくなり、いわゆる現代社会の病理の一つであるネカフェ難民を見てみてやろうとネットカフェへ根城を移した。漫画を読み、ネットを漂流し、DVDを見て、退屈した。街へ出た。空腹だった。無料カフェを見つけ、居座った。デパ地下の試食を手当たりしだい食べた。ふと周りの人々が鼻を抑え肩間にしわを寄せ彼から遠ざかっていくのに気づき、三百円ショップで柑橘系の coron を買って振りまいた。公園で炊き出しをしているのを見つけた。フィールドワークの結果、毎週土曜日にその施しがなされていることが分かった。が、彼は並ばない。そこに並ぶ連中とは違うのだ。遠目で観察する。ああ雑魚どもが群れている。悲しいな。世は非情だな。彼らにも親はあろう、愛する人もあるだろうに。ふと痩せた女があらわれ彼にパンを手渡した。彼が戸惑った目で見返すと、彼女はにっこりとほほ笑み、テントへと戻っていった。人の善意は無駄にはできないよな、と彼はそれを貪り食った。以来毎週土曜日はその公園のテント周辺を遠目に見、彼女に姿を見つけてはパンやおにぎりやすいとんをもらうようになった。いや、もらってやることにした。善行が彼女の自己表現であるならそれが単なる自己完結的行為に終わらないための手助けをしてあげるのも善行ではないだろうか、と彼は考えたのだった。それ以外の曜日は無料カフェとデパ地下をローテーションした。ネットカフェは退出し、まだまだ寒さの厳しい夜は歩き回り、昼は図書館や公園の陽だまりや混雑した駅構内のカフェの片隅で眠った。みだしなみには気を付けた。髪を整え、coron はかかさない。ホームレスではない、あくまでフィールドワーク中の作家なのだ。ホームレスではない、いや、ホームレスに仮に思われてもそれはそれでかまわない、それだけ現地に溶け込んで取材すればより迫力あるリアルを描きだせるだろう。が、それでも、俺はホームレスではないのだ、彼はそう思った。そう思ったら、夜道端で段ボールをかぶり眠れるようになった。coron もやめた。髪も解かなくなった。そしてテントの施しに悠然と並ぶようになったのだった。

自販機周辺で目を光らせた。百円玉を見つけると珠玉のごとく満足した。ごみ箱から綺麗な雑誌や新聞を拾い売った。人間関係がひろがり、屑鉄を売りさばくルートも知った。その日何が金になるか、何を食べるか、酒は飲めるか、温かくすごせるか、それが最大の関心事であり大問題となった。ふと自分が何者であるかを考える。よく分からない。いや、思い出した。小説だ。俺は世にも類まれな大傑作をこれから書こうとしている天才作家なのだった。そのための取材中なのである。ああ今日は豚汁か。おにぎりが付くといいな。おい順番ぬかすなよ、このくずめが。

ああそうだ、小説だ。妹の結婚で家をリフォームするのでそれを機会に取材旅行に出かけたのだ。もうリフォームは終わっただろう。あれからもう一年近く経つんだし。さすがに母も妹も心配しているだろう。天才の義兄にきらきらしたまなざしを向けていた若い義弟も心配しているはずだ。始まりは正月の妹の帰省だった。今度の正月は俺が帰省しよう。この天才作家の俺様の帰りを彼らはいまかいまかと待ちわびているだろうから。

建売住宅がきゅうきゅうと並ぶ住宅地の道路には、県外ナンバー路上駐車車両が列をなしている。元旦はたいい快晴だ。空は青いが電線が無粋に区切り、風揚げもできない。羽根つきする子どももいない。静かだ。彼以外歩く人間はいない。路肩に溜まったからからに乾いた枯葉をくしゃりと踏む。とおりすがりの住宅の玄関ドアが開き、年賀状をとりて家人が出てくる。彼を見、肩間にしわを寄せ顔をそむける。カーブミラーにうすぎたない浮浪者が映っている。ああ、俺じゃなくてあいつを見て目をそらしたのか。

「ただいま」

そう、たしかこの家だ。

顔を出した初老の女性に親愛を込めてにっこりと微笑みかける。そのひとは露骨に顔をしかめ、吐き戻しそうになるのを抑えるように口元を手で覆った。

「ど、どちらさま」

「俺だよ、俺。忘れちゃったのかよ、母さん」

目を見開いたその人はばたんと勢よくドアを閉めた。おいおい、いくら久しぶりだってそりゃあまりに手荒くないか。ドアが開く。今度は若い女だ。

「なんなんですか、あなた」

「よお、ひさしぶり」

「ちょっと、なんのいやがらせ？ 警察呼ぶわよ」

「なんだよ、どうしたの。兄ちゃんだよ、おまえの兄貴」

玄関を押し入ろうとする。このつきあたりにダイニングがある。今年もまた高島屋の和洋二段おせちなんだろう。できあいの刺身や寿司と生野菜を切っただけのサラダとそばと唯一の手製のきんぴらごぼう。そしてテレビは「爆笑ヒットパレード」だ。あああ、まったく無個性で通俗的な正月だな。そんな家このあたりごまんとあるだろう。隣の家でも、向かいの家でも、区別つかないかもしれない。

「おい、お前。なんなんだ。いいかげんにしろよ」

奥から若い男が出てきた。義弟だ。いよいよ未来のが取れてただのになった義弟だ。いや、そうか？ こんなにごつかったか？ もっとイケメンじゃなかったか？ もっと俺のことを尊敬に満ちた無邪気なまなざしで見つめてくれてなかったか？

おそらく彼は家を間違えたのだ。しらじらとした元旦の日光に満ちた乾いた風の中に放り出された彼は思う。ならば俺の家はどこだろう。俺の家族は。そもそも俺はなんだろう。腹が減ったな。ここはどこだ？ なんてこんなところにいるんだ俺は。正月、テントでは餅をつくと言っていたじゃないか。今から帰ってありつけるかな。急ごう。酒もでるらしいしな。電車賃どうするか。やっぱり教会の人に往復分もらえばよかったな。

ひとりの浮浪者が自販機の足元をはいずりまわる。清潔で平べったい地方都市ではその姿は雪原の落ち葉のように目立ち、善良な田舎者に追い払われ続

ける。ふらりふらりと彼は漂流し、ふきだまり、からからに乾いて踏みつけられ、くだけていく。